

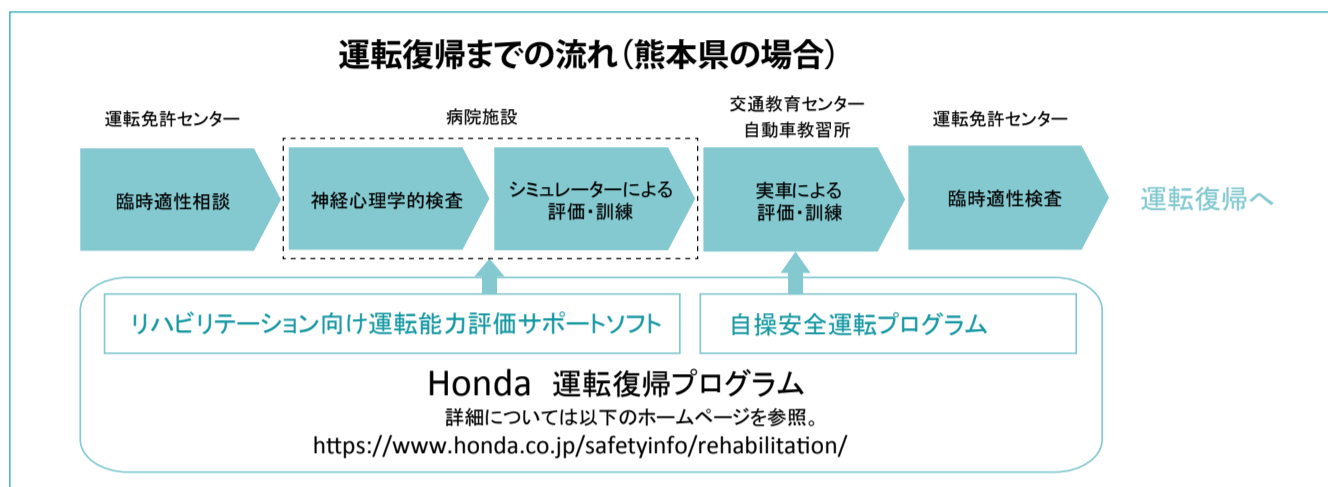
法的内容」について解説。法律で定められた運転免許制度の仕組み、一定の病気がある場合の免許更新の条件や申請の流れを伝えた。

この後、作業療法士が患者役となり、教習指導員が助手席に同乗して Honda が開発した「自操安全運転プログラム（以下、自操プログラム）」を体験。このプログラムは、実車運転時における現状の把握、そこから見えた課題に対する訓練を目的として Honda の交通教育センターで実施している。体験で使用する車両には、手でアクセルとブレーキを操作する補助装置や、左手・左足だけでハンドル、アクセル、ブレーキを操作する補助装置が付けられている。講師を務めた交通教育センターレイ

ンポー熊本の黒澤明良インストラクターはパイロンスラロームなどの課題を通じて、指定された速度を維持しているか、適切なハンドル操作ができていないかなど、その方の現状をまず把握することがポイントであると教習指導員と作業療法士に説明した。最後に、地域ごとのグループに分かれ、病院施設での運転の再開に向けた評価・訓練の実態や、自動車教習所の受け入れ体制などについて情報や意見を交換するなど、双方が交流する場も設けられた。参加者からは「教習所の考え方や受け入れ体制を学ぶことができた」「講習会の開催回数を増やし、意識改革を図る必要がある」といった声が聞かれた。

熊本県作業療法士会の内田さんは「生活行為をみる私た

ちと、運転のプロである教習所が連携を深め、事例をつくっていくことはたいへん意義があります。さらに、事例を積み上げて実績にしていくことで今後、行政の協力も得られるようになると思います」という。熊本県指定自動車教習所協会の佐藤さんは「今回は教習指導員だけでなく、教習所の管理者も多数参加しており、それだけ関心が高まっているといえるでしょう。県内を4つのブロックに分けているので、各々で受け入れ体制を整備したいと考えています。熊本県作業療法士会との連携をさらに深め、取り組んでいきたい」と語った。今後、県全体、さらに地域単位でも連携が進んでいくことが期待される。



(一社)熊本県指定自動車教習所協会専務理事 佐藤正泉さん(左)、(一社)熊本県作業療法士会会長 内田正剛さん(右)

Close Up

クローズアップ 交通教育センター

バイクに乗る体験を通じて親子の絆を深めてもらう

「親子でバイクを楽しむ会（以下、親子バイク）」は Honda のバイクのスクールの1つで、バイクに乗る体験を通じて親子の絆を深めてもらうことを目的としている。保護者が先生となり、バイクの操作方法や楽しさだけでなく、ルールやマナーの大切さを子どもに伝える。参加資格は自動二輪免許（小型以上）を保有している保護者とその子ども（自転車に乗れる小学生）。親子バイクを開催している鈴鹿サーキット交通教育センターの平井真所長は「小学生の時にバイクの楽しさを知ってもらっても、中学生以降は16歳で免許を取得するまでバイクに乗る機会がなくなってしまいます。継続してバイクを楽しめる機会を提供しようと、小学生の時に親子バイクの受講経験がある中学生も受け入れることにしました」と説明する。

7月14日、鈴鹿サーキット交通教育センターで親子バイクが開催され、中学生を含む11組の親子が受講した。この日はセカンドステージ（エンジョイコース）。子どもたちはファーストステージ（親子で入門コース）を経験しており、1人でバイクの操作ができるようになっている。オリエンテーションでは、子どもたちがその日の目標を一人ひとり発表し、インストラクターが「人の話

をよく聞く」「自分のことは自分です」「人に迷惑をかけない」という3つの約束を再確認。その後、コースに出て、トレーニングが始まる。親子でブレーキングやパイロンスラロームといった課題に取り組む。

スクールによって親子の信頼関係が強まる

小学1年生の時から受講している岩崎颯馬さん（中1）は一番身近にいる人にバイクの運転を教えてもらえることがうれしいという。「50ccからスタートして、今はクラッチ操作が必要な125ccのバイクを運転できるようになりました。これも父の指導のおかげです」。父親の篤さんは「普段の生活とは違う環境の中で親子の絆を築くことができますし、どのように伝えたら、子どもが納得してくれるのか考えることも親として勉強になります」と話す。

参加者の今井聡さんは「安全が確保された場所でバイクの運転操作を学べるのが親子バイクの魅力です」と話す。息子の翼さん（中1）は「最初は言われたことをそのままやることで精一杯でしたが、最近では自分で考えてコースに合わせた操作ができるようになりました」と小学4年生での初受講からの成長を実感している。今回が2回目となる吉田誠さんは「バイクが好きな人なら、一度は子どもとツーリングをしたいと思うはずです。



保護者が先生となり、子どもの運転を観察した後、アドバイスを伝える

親子バイクはそれが少しだけ叶えられる場所であり、すばらしいことだと思っています」と話す。娘の愛菜さん（中1）は「バイクに興味はありましたが、一人では参加する気にはならなかったと思います。始まる前は緊張しましたが、父がそばにいてくれるという安心感があり、楽しい気持ちになれます」という。

今回が44回目の受講になるという塩原肇さんは「子どもがバイクを扱うことによって、バイクの立場が理解でき、日頃の生活の中での交通安全にもつながります」と話す。息子の慳さん（中1）も「ここで身につけたことは、日頃利用している自転車の安全運転にも役立っていますし、将来、運転免許を取る時にも活かせると思います」という。

このように、バイクに乗る体験を通じて参加した親子の絆はさらに深まったといえるだろう。信頼関係を築きながら、保護者が教えることによって、子どもの安全に対する意識も高まっていくのである。



パイロンスラロームでは保護者が追走して、子どもの運転の様子を観察



直線を保護者と並走し、目標となるパイロンに合わせて停止する練習



セカンドステージでは交通教育センターのコースを離れ、鈴鹿サーキット内を走行。親子でのツーリング気分が味わえる